

# 桜工

1965-39

日本大学工科校友会

# あたらしい

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

## 校友諸君へ

工 科 校 友 会 長

### 瀬 古 新 助

#### 《自信と実践力》

私がまず新入生諸君にいたいことは、諸君は選ばれて日本大学工科に入ってきたのだ、という自覚を持ってほしいことである。東大とか京大とかいう、官立の名門大学へ入れなかったの、ここへ入るのはオレの本心ではなかったが、次善の策として日大へ入った、一流の官立へ入れなかったオレの頭は、それにくらべ少し弱い、と思う人があったら、いまのうちに学校をやめたほうがいい、ということである。

いろいろな事情で官立へ入れなかったかもしれないが、だからといって素質がないというわけのものではない。諸君は日大の工科学生としての素質を、十分に持っているはずだからこそ、選ばれて日大生となったのである。プライドを持ち、胸を張って勉強してほしい。

慶応大学は経済人を養成するとか、早稲田大学は批判的勢力を養成するとか、福沢精神だ、大隈精神だという。わが日本大学は、実践篤行、黙々として真理を追究し、困難を打破し、所期を開拓する実践、誠意型の人を養成する場である。日大工科は、過去50年にわたって、そのような学風を築いてきたと信じる。

戦後、大学がやたらに増えて、あたかも義務教育のごとき観を呈するようにさえなってきた。大学出ということが、一つの社会的格付けに使われるようになって、嫁さんをもろうにも、就職をするにも、「大学を出ていないと…」といわれるような世の中である。

自然学生の頭の中にも、大学出というものが、

社会を渡り歩くために必要な1つのアクセサリのように思う、安易な風潮がないでもない。そこで、社会的に有名な学校へ入れば、より有利だというようなことになってきて、そこへ蟻集するのが今日の姿である。

しかし、実践する意欲もなにもないただ学校さえ出ればいい、という人が、やたらと東京やその他の学園都市に増えるということは、社会的にみてもバカげたことで、才能もなく、実践する意欲もない人は、大学を中止してそれぞれ適職をみつけて、懸命にやったほうが、世の中のためにも、わが身のためにもなるであろう。

#### 《粘り強く初志を貫け》

今日、日大工科出は6万人にも達する。問題は頭数ではなく、世の中へ出て、どのように実力を発揮し、伸びていくかということである。

私が日大へ入ったころは、みんな本気で勉強する気持を持っていた。決して、自分は頭が悪いと思っていなかった。また、当時私学で工学部を持っていたのは、日大と早稲田だけだったから、学生はみんな大きな自信を持っていた。先生もまたみんな立派な人で、学生をよく指導したが、中には1人か2人、官学を出てきた先生で「お前たち

日本大学工科学友会誌

1965/VOL. 9/No. 39

桜 工

■あたらしい校友諸君へ／瀬古新助…… 5

■特 集／道と水

〈道〉 明るい道路／三浦伸浩…… 8

〈水〉 水資源・その問題点／岩間康晃……13

■喜寿の年ごろ／鈴木雅次先生の近況……23

■私の椅子／高橋武士……26

■ムウビイよもやま譚／安藤 正……28

■建設省関係工友会設立について (24) ■雑記帳

(36) ■支部だより／桜葉会北海道支部会(33)・

山形支部総会 (33) ■会合だより／あきとし会30

年記念会 (33)・専機10回生の集い (34)・専建

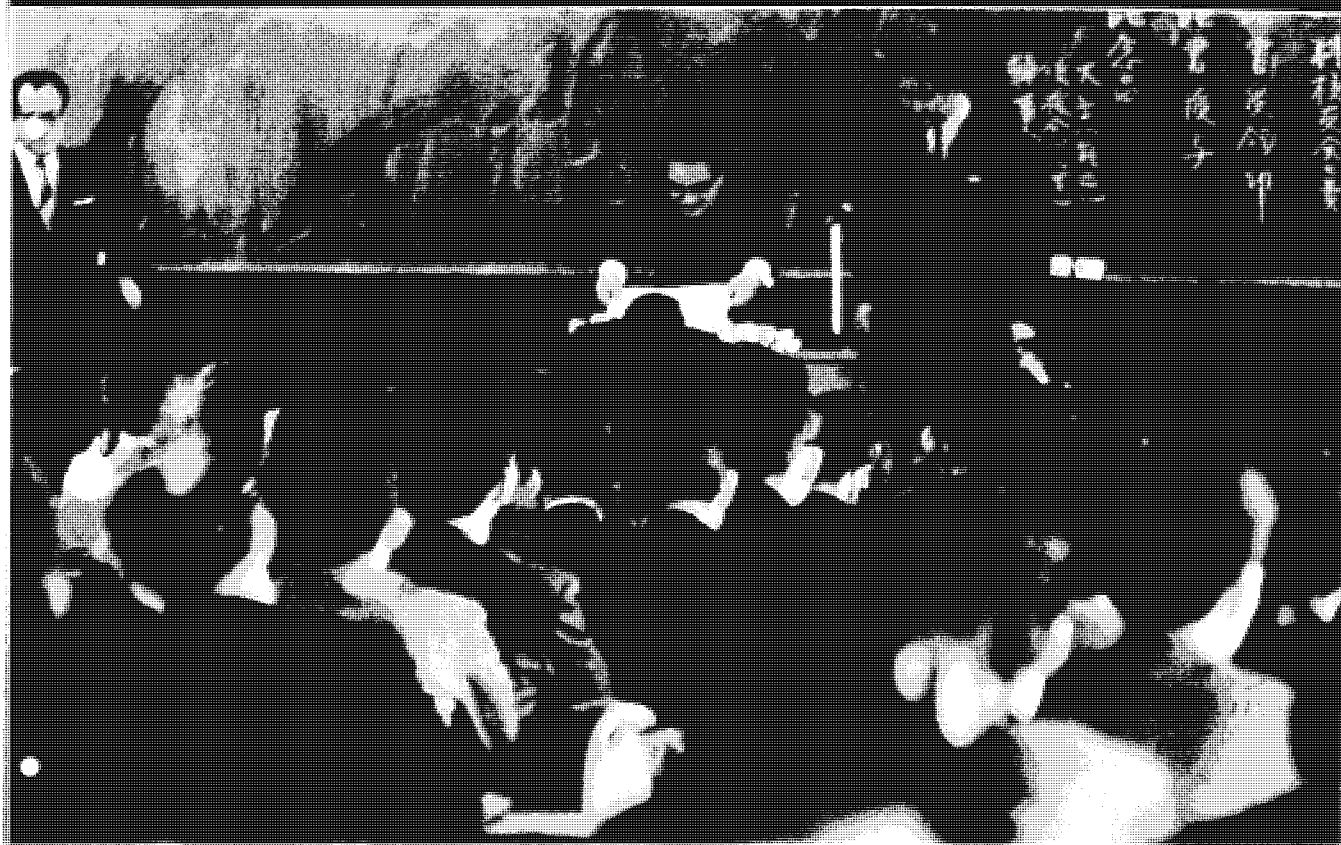
1回クラス会 (34)・桜門工経会 (34) ■学友短

信 (35)

■グラビア 卒業の時

歌／ニコライ堂晩春・池森亀鶴

# 卒業の時



建築学科の証書授与  
中央は市川教授、向って左は宮川教授、右は小谷助教授

みんなの拍手の中で、ひとりひとりの手に卒業証書が渡された。4年間、はげまされ、叱られもがき、頭をいため、遊び、騒ぎして、この日を迎えた。きょうから伝統ある日大工科出のエンジニアだ。しっかりたのむ。

---

## 桜工第39号

■昭和40年4月10日印刷／15日発行

■編集兼発行人／高木政司

■発行／日本大学工科校友会（東京都千代田区神田駿河台1の8／電話東京293—3251内線206／振替・東京162710）

■印刷／本文・鉄鋼新聞社印刷部，  
グラビア・和喜グラビア

■会誌委員／委員長菅原要（建築）  
／土木・下青木秀吉，篠本勝美／建築・安藤三郎，／機械・大内頌，青木顕一郎／電気・篠原博，高橋信夫  
／化学・大塚喜作，大内蕃／経工・清水潤／薬学・山内盛

---